

618) 収穫

久々に群馬のバッチャんの家に行くことにした。甘楽の山奥に美味しい蕎麦屋があって、その奥には昔ながらの立派な養蚕農家があるから、ソバを食って養蚕農家の写真も撮りたかったのである。ところが運の悪いことに、蕎麦屋へ行く直前に雷雲が発生して、恐ろしいほどの豪雨になってしまった。山奥まで行くにはいささか無理がありそうだ。そこで途中のラーメン屋で我慢することにした。いつも行く『バリキヤ』である。ところがラーメンをたらふく食べて外へ出ると、雨は上がって、うっすらと陽が射している。今畜生と思ったが、もう満腹でこれ以上そばを食う気にはなれない。バッチャんとやむなく家に戻って、畑に来るとバッチャんが、「夏が来て、トマトは近々引ん抜くから、おいしそうなのが あったら 持って 行きな」と勧めてくれた。我輩はトマトが大好物だったから、シメシメとばかりにハウスへもぐりこんで、トマトをもいではビニールのレジ袋に入れた。トマトハウスは300坪ほどだが、入って見るとやたらに広く、2列分ももいだら、袋がいっぱいになってしまった。大収穫である。おまけにバッチャんが畑で、キュウリやナスやアスパラなどをゴツソリもいできたから、持参した手提げバックはたちまちあふれんばかりになってしまった。この袋には着替えシャツも入っていたからひとしおである。

トマトはカメラバックに詰めることにした。デカ目のバックを持って来たが、カメラはワイドのズームしか入れて来なかったから、ガラガラである。しかし収穫したトマトが多すぎてチャックが閉まらない。やむなく小さめのショッピングバックを別に用意して、ここに少し入れて、道すがら胃袋にしまうことにした。バッチャんはレストランで食事をしてから帰るよう誘ってくれたが、オイラはさつきから齧ったトマトでそんな余裕はない。ちょっとコーヒーだけバッチャんに付き合うことにした。

高崎の駅までバッチャんのクルマで送ってもらったが、駅前なので駐停車はできないから荷物だけ手早く下ろすと、バッチャんはそのまま走り去ってしまった。カメラバックと手提げ袋を抱えてやっと歩道にたどり着いて、カメラバックを背負おうとすると、これがどうしてそうそう簡単ではない。一旦ガードレールの上にバッグを置いて、何とか両手を通した。それから手提袋を下げて歩き始めたが、どうしても不安定で、後に引きずり倒されそうである。やむなく体を前に倒してツンノメラナイように気をつけながらやっとエスカレータまでたどり着いた。幸い、もう20時半頃だったから人並みは少ない。何とか上野行の通勤快速電車に乗り込むことができた。

だが苦労はまだ終わってなかった。この荷物を担いで電車を乗り換えるのがまた一苦労である。大宮で下車するから、もう宮原を過ぎるころからリュックに腕を通して、いつでも立ち上がれるように足の位置を定めて、電車が停車すると。「えい!」とばかりに立ち上がって、エスカレータを目指した。何とか乗り換え成功、電車を降りてタクシーに乗ればよかったが、年金暮らしにそんな余裕はない。運動方々家まで10分歩くことにした。歩きながらふと思った。オイラの餓鬼のころは食量難

真っ只中の時代で、カツギ屋という商売があった、デカイ背負子に米や食料をたっぷりと詰め込んで、生産地の方から東京近辺まで毎日食料を運んで生活していた中年のおばさんたちがたくさんいたのである。我々はこの人たちを若干軽蔑的にカツギ屋とかヤミ屋と呼んでいた。当時の米は配給制で、配給以外の米をヤミ米と称していた時代である。しかしいざ自分がカツギ屋スタイルでトマトを運んでみると、いささか自分自身に嫌悪感が走った。こうやって戦死した父親に替わって苦勞をしながら、子供を育てて来た女性たちがたくさんいた。そしてこうした女性たちが戦後の日本経済を支えてきたのである。今ではこうしたカツギ屋を経験した女性は殆どが亡くなっているだろう。しかし今自分がカツギ屋スタイルで食料を運んでみると、カツギ屋とかヤミ屋と言って蔑んできた己にむしろ財悪感を覚えざるを得なかった。

おまけにカツギ屋スタイルになった足腰の痛みは、翌日までしっかりと残ってしまった。2階へ上がるのもカツギ屋スタイルでないと杖が欲しくなる。これも天罰かと反省仕切りである。考えてみりゃ一山登りなんてカツギ屋スタイルだなー。これをカツギ屋という人は今ではもういない。いい時代になったもんだ。